

小学校 3・4 年生向

見えない緑のドア

堀内純子・作 鈴木まもる・画



913

見えない緑のドア

堀内純子 作 鈴木まもる 画

東京 小学館 昭和57(1982)

114 P 22 cm

小学館の創作児童文学〈中学年版 2〉

見えない緑のドア

一九八二年五月二十日

定価・七八〇円
初版第一刷発行

著者・堀内純子

画家・鈴木まもる

発行者・相賀徹夫

発行所・株式会社 小学館(〒一〇〇)

東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一

電話・東京〇三(三三〇)五五四一(編集)

五三三三(製作) 五七三九(販売)

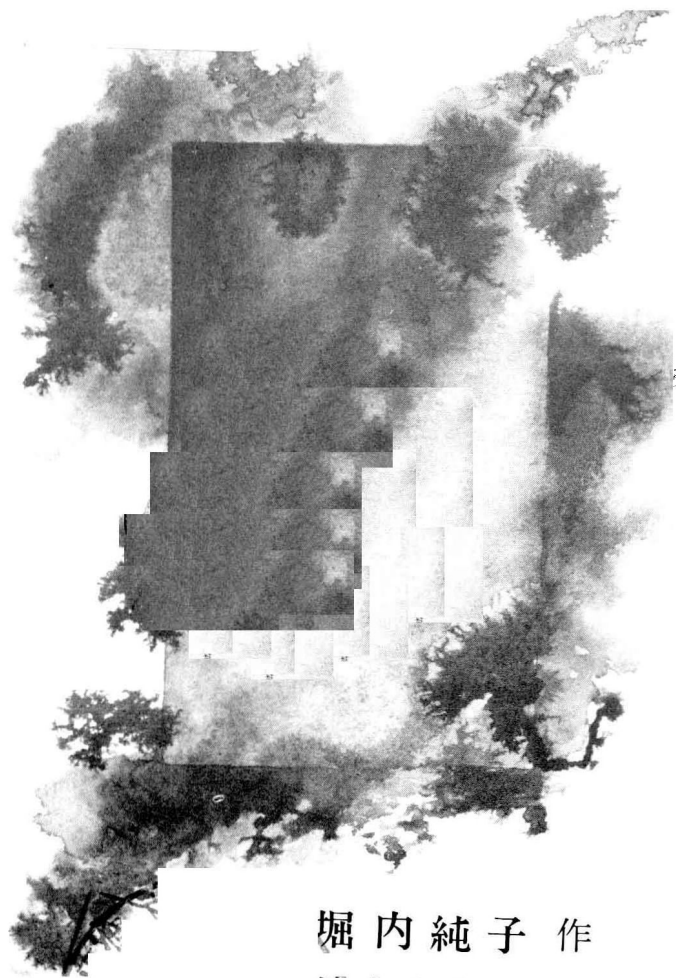
振替・東京八一二〇〇

印刷所・図書印刷株式会社

*製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。

*本書の内容の一部または全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社まで許諾を求めてください。

見えない緑のドア



堀内純子 作
鈴木まもる 画



装幀デザイン
中野博之

《見えない緑のドア》

もくじ

雨の月曜日 あめ げつようび 6

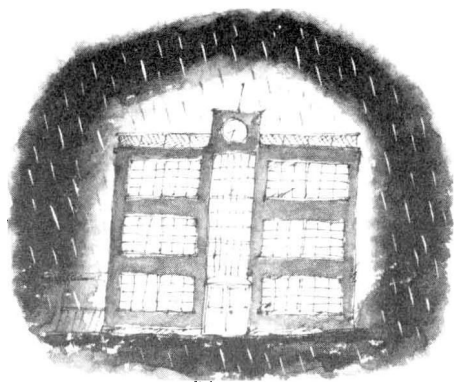
緑色のドア みどりいろ 30

きょうもしとしと雨ふりだ あめ 62

ねむの花が散った はな 92

あとがき 114





堀内純子（はりうち すみこ）

●朝鮮・京城（現在の韓国ソウル市）生まれ。幼いころ、父を亡くす。引揚げ後、約十年の入院生活を送り、その後は衛生検査技師として約十年病院に勤務、つごう二十年を病院ですごした。現在は主婦。子ども一人。

一九七一年、児童文化の会にはいり、作品を書きはじめた。一九七八年「いねむりジゼルカー」を出版、以後「いじっぱりクッキ」「ひなの星スピカ」「小さな町のゆうびんやさん」など。

●現住所 静岡県駿東郡長泉町中土狩三九六

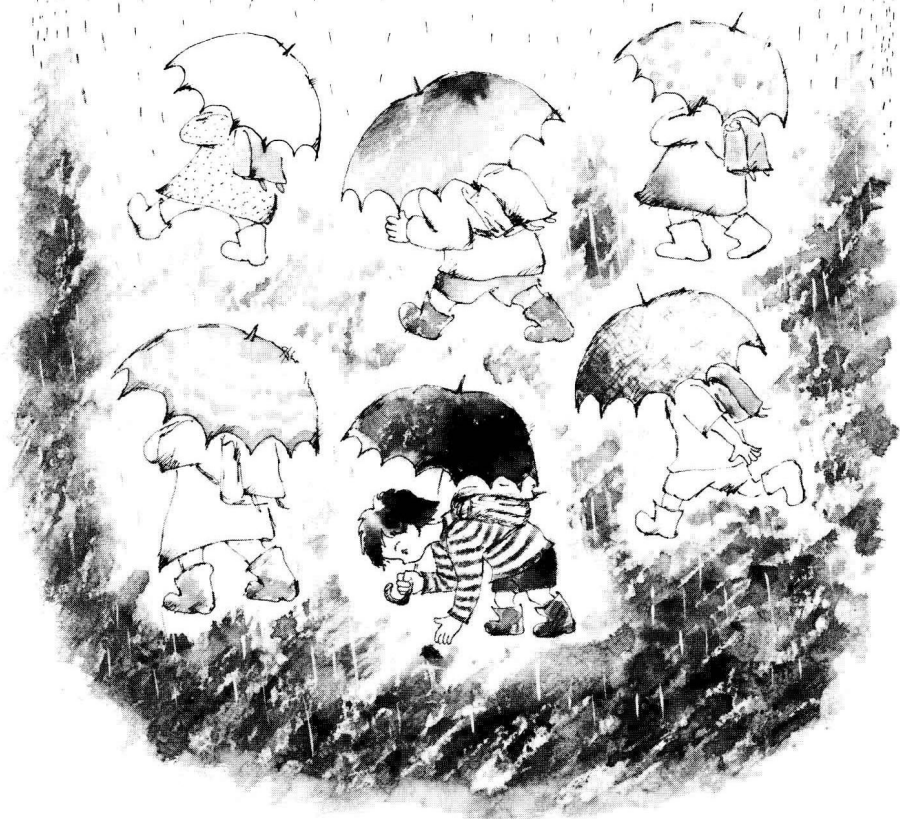
鈴木まもる（すずき まもる）

●一九五二年東京に生まれる。東京芸術大学工芸科中退。現在、子どもたちや予備校生に絵を教えるかたわら、絵本制作、童話のさしえなどに幅広く活躍している。主な作品に、「ほくの大きな木」（絵本）、「まはらのチョッキ」（さしえ）など。

●現住所／東京都目黒区洗足一―二八―一一
洗足ユニハウス三〇一

見えない緑のドア

堀内純子 作／鈴木まもる 画





雨の月曜日

明夫^{あきお}は、ものすごいきおいで学校^{がっこう}の前^{まえ}の坂道^{さかみち}をかけのぼっていた。だめだ。ちこくだ。またちこくしちゃった。

だって、へんなサイフ^{ひろ}拾^{ひろ}っちゃってさ、それを交番^{こうばん}にとどけにいったら、おまわりさんがるすでさ、しかたなくまたポケット^いに入^いれてきた。それでちこくしちゃったんだ。

坂道^{さかみち}はしんとして、きり、さめ、がうずをまくように流^{なが}れているばかり。六月^{がつ}

なかば、雨の月曜日のことだ。

坂をのぼりきったとたん、

「あつ」

明夫は立ちすくんでしまった。目の前いちめん、青緑色の古い沼がひろがっている。こんなはずないのに。ここには『元沼小学校』と書かれた校門があった、そのむこうは校庭のはずなのに……。

水の上のあちこちに、ふしぎな形をした木が枝をひろげているのが、影のように見え、雨が白いまくのようにふりつづけている。

「うわっ、なんだ、これ」

明夫は、目をつぶって頭をふった。それからそうっと目をあけると……。

なあんだ。いつもと同じ校庭じゃないか。校門の正面に、渡りろうかが見

えている。玄関げんかんのわきに先生せんせいたちの車くるまがならんで雨あめにぬれている。ろくぼくのむこうには、ねむの木きがいっぱいに花はなをつけて、ぼうっと光ひかっている。青緑色みどりいろみに見えたのは、ペンキのはげかかった旧校舎きゅうこうしゃの影かげだったんだ。あんまり走はしってきたもんで、目めがへんになってたんだよ。

明夫あきおは、自分じぶんでもおかしくなって、ふふっと笑わらいながら元氣げんきに教室きょうしつにかけteいった。

明夫あきおが、けつとばすように三年一組ねんくみの教室きょうしつのドアをあけると、もう『朝あさの会かい』がとつくにはじまっていた。

「なぜちこくした。また一日一善いちにちぜんか？」

林先生はやしせんせいが、まどぎわに立たって、うでぐみしたままきいた。

「なんだ、きょうの一善ぜんは？」

「んーと、カドヤの前でへんなもん拾って」

「へんなもん？」

「サイフ、みたいだけど、あけるとこがついてないの」

わあっとみんなが笑った。先生も笑って、

「とにかく、ちこくはいかん。もう五回めだぞ。ちょっとここにこい。おきゆうすえてやる」

と、いった。

先生に、おでこをひとつこつんとやられながら、明夫は校庭を見た。むろん、沼なんかじゃなく、ふつうの校庭だった。黒マントのきみような老人がひとり、ふらふら歩きまわっているほかは、ふつうの。

「あれ？　へんな人」

まどのそばにいてよく見ようとしたら、先生にもうひとつ、こつんをや

られた。

「早く席につけ。よしチエミ、つづきをやれ」

黒板の前に立って話しているのは、のっぼのチエミ。明夫とは家がとなり
どうして小さいころはなかよだったけど、なまいきだから、いまはあそば
ないんだ。

「…………ええと、それでえ」

チエミはウルトラおすましで、しきりに前がみをかきあげながら話してい
る。『朝のミニミニニュース』の当番なのだ。

「青葉小学校四年のいここにきいたことなんですけどお…………」

明夫は、ガタビシ音をたてて席についた。うまいとこヤジってやろうと思
いながら。ところが、チエミの声のちょうしが、このとききゆうにかわった。

「旧校舎のね、トイレのてんじょうから……」

チエミは白目をだし、手を胸につりあげて、気色わるいふるえ声でいった。
「きこえてくるんですって。赤いマントがいいかあ……青いマントがいいか

あ……」

「キヤーツ」

ひめいをあげたのは、チエミとなかよしの友恵だ。みんなもそれぞれ、

「エーツ」とか、「ギョーツ」とか、「ヤダー」とかいった。

明夫はドッキリした。トイレのてんじょうにいて、そんなへんな声をだすもの。そう、きまつてる。ユーレイだ。人間なら、あんなところに五分といられるわけがない。明夫はキュッと鼻の頭をこすった。そしてだれよりでっかい声で、

「フーン、だ」

と、どなってアカンベをした。それからサルのまねをして、ついでに友恵のおさげをひっぱった。

「なにすんのよう。……センセイ」

友恵は、けたたましくいつけたけど、先生はうでぐみをしたまま、

「ふんふん、そうかあ。なつかしいなあ。あいつ、まだいたのかあ」と、目をつぶった。みんなはびっくり、

「え？ あいつって？」

「先生、知ってるのお？」

先生は声をひそめて、

「そうなんだ。先生のかよってた小学校にもきたんだよ。こわくってなあ。

トイレにばかりいきたくなったもんだ。みんなのお父さん、お母さんのな



かにも、おぼえておられるかたがあると思うよ。だいぶあちこちの小学校に
でたらしいから」

教室はいっしゅん静まりかえり、それからみんないっせいにしゃべりはじ
めた。

「先生、そんなのウソなんだよお」

高田くんが立ちあがっていった。

「ユーレイなんていないって。人間は死ねば無になるって。お父さん、そう
いったもん」

「そうよ。めいしんよ。科学を知らないむかしの人が考えたことよ」

チェツ、友恵のやつ。さっきはまっさきにキャーキャーいってたくせに。

「いや、わからんぞ」

先生はいった。

「人間にんげんはなんでもわかったつもりでいるが、わかってないこともいっぱいあるんだ。用務員ようむいんの田辺たなべさんもいってたけど、このあたりはむかし、沼ぬまだったそうだと。校庭こうていも校舎こうしゃも、まるごと青緑色あおみどりいろのプーンとなまぐさい沼ぬまの中なかだったわけだ。どうだ、ここだって、ふしぎなことがおこりそうな気がするじゃないか」

古い沼ぬま? 明夫あきおはドッキリした。わすれかけていたさっきのけしきが、また見えてきそうになって、あわてて頭あたまをふった。

「プーンだ」

明夫あきおは、さっきより少しすこ小さい声こえでもう一度ひといった。しきりにドキドキしてくる胸むねの音おとをみんなにさとらせないため、ポカポカッとボクシングのまねをした。